寛永諸家譜

藤原氏壬四冊之内三

為憲流

112

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (112)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

相良　船越
石谷　入江
奥津　原

寛永諸家系図傳

藤原氏　之三　南家

為憲流

相良

時文

家傳ていく時文ハ大織冠十二代

時理が弟なり

浅草文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

維兼

従五位下　相良の元祖

維頼

従五位下

同頼

光頼

正五位下

頼寛

従五

頼繁

大膳大夫

頼景

四郎　法名蓮寂

建久四年　後白河院北面武士に服従の

由　昧磨郡多良木より下向す

長頼

三郎

建久九年肥後国球磨郡人吉庄
下向す
正治元年正月十日頼朝薨逝すよ
つて法師一三郎法師蓮佛と
号す
元久二年坂東二俣川合戦のとき

長頼手負疵而て疵をうけ
ゆるすのとさ為ところ此
甲冑今てもいまてあひつたふ
そのち留山彦四郎二郎重忠を征
伐したとき敗軍に先陣となつて
敵陣てみいりんとしてとき
て味方に軍兵還の袖をひく
てゝ引とりゝ人ごとに手負ひて
ゆゝ海ぶそ法ぬて還の作

神を引きつゝく歌仲小弐世子
志げ和義の歌の首をうばひ
大堺北中しわけいげれか
ゝりくゝの鐘を世くゝ傳く
相良が袖切と
兼久三郎宇治川合戦ときの歌
大綱を川瀬に相流と以
じゝ也兼覧北条殿小雪也
大綱を切ゝ
いんなく川を

ゝ言葉をそのとき常ゝ
ゝれ方を宇治川の綱切ゝ
ゝ今ゝ
北勢切ゝ相流ゝ数度
乃ゝ播磨ゝ国別回傾
ゝ京利恒衣上毛下毛を
加信を
建長六年三月十九日死を歳七十八

頼親

四郎兵衛尉

実名不詳

頼親道念あるべきこと実名

義八幡社家のとき先祖こゝ

武門に同じ法人のうや

むとこゝ詠ぜ実名叢逝より

て法師一覚と号とそのち

法師に勅宣とかゝ始て覚法師

と号す

頼俊

九郎　法名迎蓮

正應年中異賊を討戦書あり

その一ことばいとく

異賊合戦勲功事近可法

神妙伝物達の体

正應元年十二月一日　　法奥書左判
相模九郎入道殿　　相摸書左判

長氏

六郎三郎　法名蓮忍
元弘年中合戦の間
所々に
為胡敵逆討所被召軍兵や

被合戦仏恩可被賞之由
依御教書状
元弘三年六月十六日　　大神左判
相模六郎三郎入道殿

頼廣

孫三郎　法名蓮表

定頼

兵庫允

後光厳院の御宇延文二年十月十八日

編旨を拝して兵庫允に任ぜ

法名覚円

前頼

近江守　法名立円

親王宣旨　令旨あるその詞ありく

肥前国守護職為日向国猶可令

知行者

元亨二年二月十七日　左馬権助判

本領新恩地並備事　先度被

仰畢管領不可相違者

天皇御宸筆状

元亨二年十月十日　左中弁　左判

相良近江守殿

實長

兵庫允

義経の軍に兵庫允と見える

法名実阿

前續

近江守

義経の軍に近江守と見える

法名芝蓮永述

尭頼

三郎

法名悦山太郎

長續

蔵五郎

義教の軍に左衛門と見える

後刑部卿院と頼と

應仁二年二月廿日記之　法名宗山

為續

加藤肥前　法名西巖道船

義尚為軍ニ加藤肥前ハ行ぜるを

いそぎ和合の儀ハ相ゆるす

しかるに京都法師が吹噓とり

て為續諸国と新荒久波集

北山ニ入

その内八代ハ小ぶ七代を

せめ取てその地を領じ是天草

郡を取る

長毎

右筆

義尚為軍ニ近江守ハ行ぜる

法名大地道心

長祇

右廓　法名大善道世

長定

民部大輔

実者為孫ゞ兄相模守頼令ゞ嫡子

なり

享禄四年ニ死ス　法名和池道秀

義滋

近江守

実者長祇ゞ兄なり

天文十四年十一月二十日官務

勅をうけ西ノ京肥後守下向

同十二月二日従五位下ニ叙せられ

元四ノ輔ニ任ぜ　法名法永幸

時廣

殿下御　従五位下　右兵衛佐

法名北山蓮華

義別当源津氏と不和なりしを

て数度兵乱を企ゆゑ

無実を信事と没を又肥後国阿蘇

惣と数度桃戦ども勝利をなす

とふるの

義陽

俗姓大夫　従四位下　初八四郎左衛

門房を号す

義輝将軍上野紀伊守源輝秀

とりなく法ゆゑ肥後国

下り住まひ永禄七年六月二日

俗姓大夫下位ゆゑ義の字を

しまふ給ふて杉房を

あ〳〵先義場と号し
天正九年十二月二日肥後国
彌書原にて〳〵義弘
法名越山道芳

忠房

四郎左郎
天正三年二月十又日幼年にて
弘にてうせなし〳〵長毎にて

家督とけそ〳〵し

法名天膺玄清

長毎

左兵衛佐
文禄元年朝鮮陣のとき長毎
十八歳にて〳〵活海〳〵の地に
上陣なされ〳〵七年なり
安色洲に漢南境にあるて
釜鮮枢要乃地なれ敵を攻

清正あひしたがへ生駒を
地とゆるしむこれ也ゆへ生駒
他兵と加藤生駒とを
ゆ鮮の大船こゆ
紀ゆ敷城生駒
軍ゆ長谷川ゆ
ゆ
乃軍兵安宅城を囲ゆ
生駒
れを守るまて

及ともせやゆ
ゆ生駒城をゆ
ゆ
乃地ゆ生駒
くれを守
戦場ゆ
ん清正ゆ
ゆ
切ゆ清正

乃城を郡代奥平あきとさ
小清正組中乃もれて語ていく
我も毎年くく安色城を海
しむ長毎ゐず討死をべと
れ我彼ゐ孔生を三ぶて
郡平卦事ゐれ而目ひん
やくく清正すれいら安色城平
三平を毎ゐ平ゐ郡小
いくゐれ安色城はやこれ

奥平あきとれくく猛ゐ
勇士ゐとふとをいくこ
れ奥平いく孔のゐ小時小
ありくく鮮平海ゐ撰
目れゐとを秀吉小くく秀吉ゐ
くゐ毎ゐ軍功を感ぞ
金羅乃晋州の城をもゐとき
を毎戦場平くくみく城と
ゐ毎家臣源水新兵城

白牧使判官を討捕このとき法
卒疱瘡を加へ梅を戒義孔を者
はるばるおそ
南原城を攻る水さ大門口
とし〳〵毎が敵人あるひを
石ゝうれひを疱を加へ
姫を戒を討孔ゝの数を高
しば唐浦ゝ大的の鮮二艘
乃人力と并せ謀と合ゝ兵船

なるふを毎ゝれとなふゝく三艘と
はをゝ
薩州は住人梅小ゝ門鳥朝鮮波
海北元ゝを一揆をおこし
ゝの力を使乃城ゝあるゝ
先年ゝ八代ゝゝ攻む
ふゝゝ小西摂津守が敵人
かゝれを攻るゝに
敵兵又責は浦の城を攻はひま

毛利ノ家臣球磨ノ辛ヒキ
ハ作安ノ城ヲ攻メ
文四郎門ノ従辛四十余人ヲ討
捕ヒ其ヲ作安ニ於テ
梟ス味方ノ軍兵文四郎門ノ首ヲ
切ラレ辛ヒ毛利ノ
辛ヒ城ヲ攻メ城兵ヲ
二十余人ナリ四十余ノ首ヲ
切ル石護

秀吉ノ計
慶長ノ役毎上京ヲ
東照大権現上洛ヲ
ヲ奥州ノ奥州
也又石如ノ
ヒヲ作和
石田治部ノ捕ヒ
禁ル

少ク大臺吉助ト聊別ニ
一封ノ書ヲ井伊兵部少輔ニ渡ス
拝ていノ書ヲ毎度ごとニ
大權現ノ御ヲ以くさんかしてヲ
率ヲ元きしてノ関東ノ心ヲ
いんどヲ三成ノ為ごてられ者さ
とくるすいこごて軍ヲ企て
やうあ三成ノ伝伐れとさるカヲ
いくして軍四ヲはげまんべき

やなとてノ大臺下野國小山
ノいるる事政ヲれりるれヲ
大權現ノ云上しまつて返
書ヲあふ大臺これヲ拾て上京
ヲるるところノ三成濃別山中
ノなるしく新関ヲて往還
軍ヲとぐむ大臺物くなんぐ
つま書ヲ源四ノ上幸ル
命ヲとまあれ物ノのぐまいとて

関東より毎年毎年くるのち
毎年三成が備後へ下向
事となるべきて法別大垣の城番
をしてこむ時より三成並岩間義亟
垣見和泉守本村出雲守父子
て城をもりこむのち
大檜城波年ていたしく法合戦あ
べきしに秀吉及ていたて惣領家
新助義田年助をもりて惣吉より

けげくいさきより諫をあて
ちるごとく
ときあるを駒今ゆ
ちやうに大垣城をあさ
大檜城は麾下にあるべ
とさてをしく惣吉書を
さりけていたく
大檜城安とぬを通ぶ
ちでより日久しきやう忠義を

ぬきんでべし志をいたすに
秋月右馬介殿ものも毎のぞむ
ところなれども
賞あるべしと秋月右馬介長毎と
同所にして志を江戸ゟ
通ずるゆへなりとして
越前国義恵堀尺和泉守木村出雲
同長男備後守播磨守両級の
首をとりて水野日向守陣ゟ

とくるときて出る
大権現ゟ言上してまいりこと
ろ下はるゝ毎ゞ軍功と感
ぜらる
同八年三月従不法下ゟ叡せる
大坂御陣のときき
大権現ゟ仰せて
元和元年日向守権柴山蜂起して
あるべし所しこまく行ゝ

正之上人保寿院為成法使ニ
して下向せ毎年毎日正之
忠成とあひはらせ聖記の族と諫
をこれすまくく山中とくを
さぐまるね
寛永十三年六月十二日江戸にをひて
卒去歳六十三 法名天典玄言
慶長七年より毎年毎日祝人をもて
江戸にまつれ西国祝人の下

頼寛

三波守

十七歳ニしてく論府すること
大僧現ニ相渇しくまりて
のち江戸にまつ
宗源院殿ニ相渇生まれる

めをもて寛永六年七月十日江戸ニ
なくなる歳八十 法名平心

元和六年八月従公儀下ゝ殿せられ
そ波守ゝ仕ゝ
父ゝ喪いまゝとゝ
とゝゝ勿ゝて母ゝ毎ゝ家督とゝ
琉球那ゝ頼ゝて
母ゝ秋月宗圓ゝ女なゝゝゝ心ゝゝ
浪人ゝゝ江戸ゝゝて寛永
十一年四月十ゝ死ゝて

頼在

主殿助
二十三年ゝ
台徳院殿ゝ拝謁
江戸ゝゝ

家紋

国立公文書館
National Archives of Japan

船越

家傳ていとく三郎為憲が後
胤入江右馬允維清はすゑの八郎刑
部丞維貞三人新田
を形ちとりて孫渋川中務
大輔道定右香冷郎丞越
三郎維貞三人新田
て維貞右京亮と西治

二度正り勢力家強しの比正り
たりしく桜京父子と諍ふ時
丹波淵川右衛門が一族桜京父
子当と討掠その賞として西
北地と領す丹波三郎淵の
淵りうりつを居て変地庄論
文城ときしくくうるゆゑ小論文の
丹波北条氏

●定氏

北条一府　生田淵
変地庄論文にて領
あるとき領内古津ぬしの大蛇出
定氏矢を射ると
ころ

定俊

右兼一府　生田内おの

京倫

孫次郎　生國同所
三好修理大夫殿

京直

鷹狩　後藤鷹狩こあるべし
生國同所
三好修理大夫殿ゟ遣ス使別紙

守護安宅摂津守殿ゟ蒙り候ヲ
好之康ゟ摂三好長治ゟ遣ス
玉置善中ヲ
弓大将となり
日十八歳小田原陣のとき秀吉
ゟ遣ス使ひ
文禄元年朝鮮陣ヘ別紙小西
摂津守ゟ海ヲ
はけまそ渡海の

彼地をあらため播磨河口丹波乃
うら数ケ所にて生くく食為を
くらへ出まし
同日豊后秀次自宮の時京師
をとも秀次にて出ける也
をとりくく南部にて生ぐさき
物
京師大橋現出れくを頃を始る
豊臣あり関白東陣のこと仕度
くく軍功あるこれ様人にて和別
宇治郡にて生くくを言ふ
乃彼地をくくを出ける後別
にて行くくまる
同十六日三月十七日七十二歳にて
死去

永京
三郎四郎　奥別南部生れ

永京八歳のとき後府をもて
大権現小拝領してまつる
そのちはつかいこまる
台徳院殿
将軍家をもつてまつる

家紋　たゝ巴

石谷

家傳ていとくのまたは二階堂と
号して大織冠十一代藤原為憲
北後胤なり政清を別石谷村
に住して村の西南に大岩石
ありて一名岩殿と八幡の宮あ
り是村の氏神なり政清氏
神社を建て石を岩

この人二階堂とあらためて
石谷と称す

行秋

二階堂図書守　法名行歓

行時

右馬允
を列和田左近人和田民部権

二男民部の輔を行秋が妹婿とす
そのいもうと行時をうして孕
行秋行時と
家督をゆづむ
文明十二年六月十七歳にて死
法名永昌

行清

和田右馬允　左近の長小太郎

二階堂とあらためく和泉と称し
祖父氏部が補ぶ称号をとりゆ
行清が弟清捷を二階堂と称を
永正元年九月十二日五十九歳にて
死を　法名三休

清直

二階堂左馬助　和泉石谷村に生る
祖父行時清直を養育しその
ひとりなるをもつて元服せ
しむるときこれを名乗とゆゑあて
二階堂とあらためく称号をあて
天文二年二月九日六十一歳にて死を
法名宗月

政清

石谷十郎左衛門　生年月日お
元亀二年三月十日政清をうばふ

嫡男政信二男清定一旦よりなれて
東照大権現ゝつかへたてまつりぬ
天正二年四月十四日七十二歳にて
死す　法名竜月院隆

政信

十郎兵衛　生母同お
元亀二年三月十日父政清ゆゑ
ゝ政信二男清定父子三人めさ

まく
大権現ゝつかへたてまつる
慶長十年二月ち
台徳院殿ゝ仕へたまひる
元和元年六月廿七日五十五歳にて
死す　法名良完

清定

左兵衛尉　生母同お
元亀二年三月十日父政清ゆゑ

下ゆされて
大権現にてくまりる
寿永六年六月二日年五歳にて
死去　法名浄無

清正
友助　生国日向
慶長七年ゆされて
大権現にてくまりる

元和二年ゆ
白河院殿
将軍家にて法くまりて
奥清
十義　武州多東和泉村に生る
寿永十年ゆされて
白河院殿にてくまりて今
将軍家に法ふまつる

清充

七助　尾州那古屋より出

寛永十年八月十五日

将軍家へ御目見仕

小性組に番を仰せつけられ

政勝

市右衛門　生母お

慶長六年九月

伝述院殿へ召し出され

仕小性組の番を仰せつけられ

寛永十一年十月大御番を仰せ

つけられ

寛永十八年三月御裏門御番頭を

仰せ付

将軍家へ御目見仕十一年乃

召出され

成瀬

兵部卿　武州江戸にて生る

寛永七年六月

初軍家に謁まつる

同十四年正月朔日大御番を仰せられ

家紋　九曜

入江

春倫

左衛門
尉氏の軍に
指別言擬の御
代くに居住
せる中級

春澄

助重　生国摂州

秀吉ニ秀頼ヲいさめて不

元和元年四月廿日大坂城ニ

て討死　六十四歳

春重

源義　生国同

秀頼ヲ[illegible]大坂籠城ス元和

元年四月廿七日

京師大橋現ヲめいぐされ

右法院殿ヲいさめ法名[illegible]

寛永三年四月廿日死ス年廿十

法名宗心

春正

源義　生国同前

右法院殿

将軍家ヨリ下サレ書付

家紋　三鱗（みつうろこ）位上の一丸鱗の日覆（いぶくろ）

奥津

為憲

左近将監

時理

時信

後河守

維永

従五位下

維清　清房

右弓兄　四郎大夫

維道

奥津と称して
山間に絶て

栄

円記　生国豊後

東照大権現てつてつまりて
仕あつまく
台徳院殿御誕生のときまゐ
りてまつりて清ふまつる
寛永二年四月廿日七十歳にて
死て　法名常益

徳能

円記　生国日向

右法院殿ヲ法名ト奉リ
元和九年九月十九日ニ十二歳ヲ
以テ死セリ　法名常照

忠行
門死　生母武蔵
右法院殿
将軍家ヲ奉リ
十二歳余ル
能ヲ演ス

家能
兵庫　生母同日
将軍家ヲ奉リ
家紋　剣菱

国立公文書館
National Archives of Japan

原

東

三葉　生国三河

重久

兎義　生義信流

東照大権現ヲ[illegible]

重國（しげくに）

勅奏

生國魂（いくたまの）

家紋　木瓜（もっこう）

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan